

## 謝冰瑩

— “女兵” 作家の軌跡 —

阿頼耶 順宏

(一)  
一九八二年三月、福建人民出版社から出された『台湾和海外華人女作家作品選』上冊（閻純徳主編）という一冊の本を手にして、わたしはある感慨にふけた。

台湾、香港をはじめ、海外に在住する中国人女流作家の作品が、中国で出版されるようになったこと——それは、この国が近年とっている開放政策の具体的なあらわれでもあり、それ自体画期的な事件であったからだが、ほかにもう一つの理由があった。収録されている二十一人の女流作家の中に、謝冰瑩の名を見たからである。

この書物には彼女の簡単な経歴紹介と、『一個女兵の自伝』の抄録および短編「愛晚亭」が収められている。国民革命軍の北伐（一九二六、二七）に参加し

た体験を書いた散文集『従軍日記』（一九二八年、上海春潮書局）は翻訳されて国際的にも大きな反響を呼び、ロマン・ロランも感激して手紙を彼女に送ったという。当時、日本でも彼女の作品が次々に紹介され、謝冰瑩の名は、われわれの世代には懐かしいものであって、その彼女と、わたしは「たえて久しい対面」をしたわけであった。<sup>(1)</sup>

一九〇六年生まれの彼女は、いま年齢八十歳をこえ、アメリカ、サンフランシスコに余生を送っている。前記の書物に掲載されている写真では、以前の渡航の際、船中の事故で骨折して足の不自由な彼女が、杖を手にして花の世話をしている。こうした平安の日々を送るまで、かつての“女兵”作家の歩んだ道は、まさに、現代中国八十年の激動の歴史そのものでもあった。

その後、八三年六月には閻純徳主編『中国現代女作家上』（黒竜江人民出版社）が出て、彼女についての評伝が載っている。（八五年六月、上海文芸出版社から出た『女兵列伝 第一集』にも、「不老的女兵——記謝冰瑩」という閻純徳の文章があり、『中国現代女作家 上』に収録されたものと同じであるが、一部省略されたところもある。）

さらに、八五年九月には張永如の責任編集による『謝冰瑩作品選』が湖南人民出版社から刊行された。七五〇ページの大幅で、文革期を経て散逸した作品も、八方手を尽くして収録したという労作である。この書物によって、総計一千万字余り、六十数部の作品を書いたといわれる多産作家謝冰瑩の、五十年をこえる作家活動が鳥瞰できることになった。

(二)

湖南省のほば中央部に、新化県がある。洞庭湖に注ぐ資水の中流の地である。一九〇六年九月五日、謝冰瑩は湖南省新化県同鎮鐸山に生まれた。本名、謝鳴岡<sup>③</sup>、字は鳳宝、またの名を謝彬といった。

父親は清朝の挙人で、詩文をよくし、新化県立中学校長をしたこともあり、博覧強記で生徒から「康熙字典」のあだ名をつけられたという。彼女が五、六歳のころから、父親は『唐詩三百首』、『隨園女弟子詩集』、『史記』等を読ませ、彼女の記憶力のよさは人をおどろかせたが、母親は勉強よりもむしろ良妻賢母にならせるための教育をのぞみ、纏足や耳輪の穴を彼女に強要した。四男二女の子どものうち一番下の冰瑩は、父母から溺愛さ

れていたが、反抗心の強い子どもで、学校に上って勉強したいという要求を母親に認めさせるために、三日間絶食したこともあったという。

「わたしはまるで男の子で、女の子らしいところは少しもなかった。男の子と一緒に遊ぶのが好きで、隊伍を組み棍棒を手に兵隊ごっこをするときも、いつも号令をかけて指揮したがつたので、みんなはわたしのことを総司令官と呼んだ。大きくなったら兵隊を率い、大きな馬にまたがり、きらきら光る指揮刀とピストルを身につけて、勇敢に戦場を駆けめぐることがいつも夢みていた」<sup>④</sup>

と回想する彼女だが、母親は当時の風習にしたがつて、まだ三歳の彼女のための「婚約」をすませていたのだった。

十二歳のとき、私塾から大同女学校に入り、翌年、新化県立女学校に転学するが、さらに一九二〇年には益陽の信益女子中学に移った。特に英語を重視するこのミッション・スクールで、礼拝にも出ようとせず、国恥記念日<sup>⑤</sup>には日本帝国主義反対のデモ行進をしようと級友たちに働きかける十四歳の謝冰瑩は、退学させられることになる。

翌年（一九二一）、彼女は長沙の湖南省立第一師範に合格する。五四運動後、急速に全国にひろがった新文化運動の波は、ここにも押寄せていて、新しい環境で、小説をむさぼり読む文学少女に彼女はなっていた。早く大同女学校のころから、「わたしは初めてモーパッサンの『二人の漁夫』、ドデーの『最後の一課』を読んだ。これらの愛国物語に感動し、新文学に対して非常に興味がおこった。」<sup>7</sup>という彼女はこの時期に、モーパッサン、ゾラ、トルストイ、ドストエフスキー、小デュマなど当時続々と紹介された外国文学作品や、『水滸伝』、『三

国志』、『紅樓夢』などを愛読した。

一九二六年、北京の軍閥政府を打倒するため北伐が開始される。蒋介石を総司令とする国民革命軍は、この年の七月広州を出発、八月には長沙を占領、九月には漢陽、漢口、十月には武昌も占領され、若者たちは争って革命の隊伍に身を投じようとする。しかし、彼女はこの年の夏休みに、岳麓山（長沙市の西部）の道郷祠で肺病の療養をしている次兄に付き添って、『牡丹亭』、『燕子箋』、『西廂記』、『琵琶記』といった元、明の戯曲を読みふけていたという。そうした彼女を叱りつけ、新聞で、武漢の中央軍事政治学校が「女兵」を募集することを知

ると、彼女に応募するよう勧めたのも、この次兄であった。母の命ずるままの結婚をして苦しんでいた次兄は、謝冰瑩が同じように封建的な結婚の犠牲者にならないためには、従軍するのが最善の方法だと熱心に説いた。「これがお前自身を解放する唯一の道だ。結婚問題とお前の将来の進路のためには、革命に参加する以外に方法はない。」といわれ、彼女も決心を固めることになる。<sup>8</sup>

(三)

一九二六年冬、謝冰瑩は武漢に行き、西湖書院の中央軍事政治学校第六期女生部で「女兵」としての厳しい軍事、政治訓練を受ける。一緒に入隊した二百余名の「女兵」たちは、お嬢さんや奥さんの混成部隊だったが、纏足していた女性も多くて、軍服に巻脚絆、銃をかつぎ弾帯をつけて、エッチラオッチラ、あひるのようからだをくねらせて歩いた。

翌年、彼女は北伐軍に従って北上し、毎日平均八、九十里（四十キロから四十五キロ）という行軍と作戦、大衆工作のひまをみては、地面にすわり、膝を机がわりにしてこの従軍の記録を書いた。彼女が武漢の『中央日報』に投稿した『従軍日記』を読んだ副刊主筆の孫伏園は、

一九二七年五月十四日から六月二十二日までの『中央日報』副刊に連載し、つづいて林語堂がこれを英訳して英文版に連載、のちには仏、ソ、日、朝鮮語版も出版され、謝冰瑩の名は世界の文壇に広く知られることになった。

だが、北伐は失敗し、「女生隊」も解散となって、女兵。謝冰瑩は重い足をひきずって家に帰るしかなかった。母親をだまして従軍した彼女を、女の兵隊などになって家名を傷つけたと怒った母親は、娘が三歳のとき婚約させた蕭家へ、なんととしても彼女を嫁がせようとした。

両親の説得にも必死に抵抗した彼女は、三度も家から逃げ出しては連れもどされ、とうとう四回目には、彼女自身が「人形芝居の主役となって、一幕のおもしろい悲喜劇」を演じ、花嫁かごにのって蕭家に行き、天地を拝して蕭明との結婚式をあげて、両方の親を安心させながら、夫とは夜を徹して話し合い、愛情のない結婚をすべきでないことを主張する。夫が勤務先にもどったあと、土匪襲来の事件などがあったのち、どうして蕭家を逃げだそうかと考えていた彼女のもとに、母校の大同女学校長から六年生の担任をしてほしいという依頼状が届いたのを幸いに、長沙に出発するまでの事情は、彼女の

自伝にくわしく書かれている。<sup>9)</sup>

#### (四)

小学校教員としての生活も彼女の理想とは程遠く、若くて才気ある女教師は、子どもたちからは好かれたが、周囲の教師たちとは合わなかったらしい。彼女はついに湖南を去る決心をし、漢口から船で上海にむかう。上海では孫伏園が暖かく彼女を迎え、いろいろな世話をしてくれたが、十日後の朝早く、原稿を書いていた彼女は、突然警官に逮捕され、牢に入れられる。五日間、食事も与えられず、あやうく死ぬところを孫伏園の援助で保釈となるが、それは彼女の借りたのが人さらいをしていた家で、家主の悪事が発覚して、彼女が巻添えをくったためであった。

獄中で、荷物、書籍から原稿までをなくした彼女は、ぼろをまとい、飢えに迫られながら『時事新報』や『申報』副刊に作品を送っての売文生活を続ける。『当代』の編集主任をしていた孫伏園は、彼女の大学に進みたいという希望をかなえてやろうとする。結局、銭杏邨(阿英)の紹介で、彼女は上海芸術大学中国文学系二年に合格する。このとき同時に入学した王克清は、往時の演劇

界で有名な女優であり、映画スターでもあった王澐その人であった。

謝冰瑩は長沙の湘雅病院で一時看護婦をしたことがあったが、王克清はその折の親友でもあった。すでに上海社交界の花形となっていた王克清は、あいかわらず昔の友人に親切で、冬に綿入れの上着ももっていなかった謝冰瑩にそれをプレゼントしたりした。

「……このぼろぼろの綿入れは、わたしの唯一の財産で、昼間はオーバーとして着、夜にはふんととしてかぶった。わたしは永遠に勤を忘れることができず、その頃の飢えと寒さに耐えていた生活を永遠に忘れることはできない。」<sup>11</sup>

と謝冰瑩は当時を回想している。

四日間、食事をする金もなく困っていたとき、『軍日記』が出版されることになり、腹がへって我慢できないと、春潮書店に走っていった金借りたという。

上海芸術大学はフランス租界にあり、当時、進歩団体や学生の愛国運動はにらまれていて、三度めの捜査のとき、謝冰瑩も逮捕され、学校も解散させられた。このとき、三番めの兄から為替と手紙を受取ったが、それには北平へ行って女子師範大学を受けよと書いてあった。

生活は苦しかったが、自由で進歩的な空気のある上海を去ることに未練はあった。が、一九二九年五月一日のメーデーの日、彼女は北に向かう船に乗る。北京につくと、『民国日報』副刊を小鹿（陸晶清）と一緒に編集するが、二か月で出版禁止となる。彼女が女子師範に入学できたのは、文学系主任の黎錦熙教授の推挽によったというが、この頃彼女には生まれて間のない娘がいた。夫は北伐時代の友人で、若い詩人の符浩であった。彼女は自分の勉強のほかに、毎週十二時間の国文の授業をもち、夜の十二時を過ぎてから文章を書いて生活を支えなければならなかった。当時、彼女の使ったペンネームは十以上もある。夫の中はうまく行かず、何度も首を吊って自殺しようとしたことがあるというが、やがて夫が捕えられたあと、彼女は積極的に左翼文芸運動に参加するようになり、国民党当局から犯罪人とされ、ブラック・リストに載る。逮捕されるといふニュースが伝わった夜、彼女は友人たちに送られ、津浦線に乗って南下する。

南京から武漢に行き、子どもを符浩の母親に預けて執筆活動をしようとするが、逃亡の知らせが武漢に伝わり、湘江対岸の岳麓山にある崑滂亭に身をかくす。

やがて彼女は故郷に帰って、母親に会ったのち、もう

一度上海に出て、新しい出路を求めようと決心する。

(五)

一九三二年夏、彼女は上海江湾の暗いへやで、寝食を忘れて執筆し、三週間足らずのうちに『青年王国材』と『青年書信』を書きあげた。前者は彼女が初めて第三人称を使って書いた長編小説で、王国材という青年と博英という女性を主人公としたもの。

「わたしは昼も夜も書くことに没頭し、食事もせず、眠りもしなかった。時には、いくつかパンを買ってきて机の上におき、おなかが空くと、左手でパンをもつてかじり、右手は字を書きつづけた。夜に、書きくたべれると、着たままでベッドにぶつ倒れ、群をなしてやってきたねずみが、パンをひいていくのも知らなかった。翌日、眼をあけるなり、顔も洗わず、髪もすかず、また机にうつむいて書いた。」<sup>12)</sup>

この二冊が出版されて、六百五十元という大金を手にしたとき、彼女は東京に留学して勉強しようとして決心する。長崎丸に乗船し、「籠にとじこめられていた小鳥が逃げだしたように」喜んでいた彼女だったが、長崎に到着したとき、「九・一八」事変が勃発しており、彼女は「皇

軍瀋陽を占領！支那軍惨敗！張学良逃亡！」という号外をみる。

日本に留学中の中国留学生一千余人が、東京で「東北死難烈士追悼大会」を挙行して、日本の警察と衝突し、やがて大部分の留学生が続々と帰国することになる。彼女も上海に帰ったが、間もなく、「一・二八」（一九三二年一月二十八日、第一次上海事変）が起こる。彼女は著作者抗敵協会に参加し、昼は救護隊のしごとをし、夜には原稿を書き、週刊『婦女之光』を編集したが、強制停刊させられてからは失望して福建に行き、厦門中学の教師となる。しかし、ここでも彼女は「福建人民政府」の活動に参加して婦人部長になったとか、社会民主黨員だとか言われ、逮捕されそうになったため、ひそかに上海に戻ったが、上海『申報』に出た指名手配人名簿には彼女の名もあった。

柳亜子の勧めで、帰郷して身をかくすことにした彼女は、長沙に行き、妙高峰青山祠に住み、一日中とじてもって『一個女兵的自伝』を書いた。良友図書公司以中国文学叢書の編集主任をしていた趙家璧が、何度も手紙で早く書くように求めていたもので、彼女はもう一度日本に渡る旅費を準備したかったのと、当時の精神的な苦し

みからのがれるために、これを書くことを承諾した。

一九三五年、彼女は二度目の日本留学を果たし、早稲田大学文学研究院で西洋文学を専攻することになる。主任は本間久雄教授で、新居格とも知り合う。彼女の計画では、三年日本語を勉強したのちに、ゲートル、トルストイ、ロマン・ロラン、バルザック等の最も崇拜する作家たちの傑作を、全部中国に紹介することであった。

(六)

一九三六年四月十四日の夜、彼女は逮捕されて目黒区警察署に拘留される。逮捕された原因は、「満洲国皇帝溥儀の日本訪問を歓迎に行くか」と刑事に聞かれて、謝氷瑩は、行かないと答え、「溥儀なんてやつは、すべての中国人から唾棄されている漢奸にすぎず」「満洲国」なんか絶対に承認しない」と、反対したからだった。彼女は三週間の監獄での生活の中で、太い棒で頭を叩かれ（このため以後ずっと頭痛に苦しめられることになる）、四本の竹を使って手の骨を折られそうになって、氣を失うといった体験をする。

のちに彼女は、友人から再三勧められて、一九四二年の夏に、華山の三元洞で『日本の獄中にて』を書いたと

きのことを回想し、

「わたしは完全に別人にかわったようで、やや誇張していえば、まるで狂人だった。頭の中には昼も夜も、時々刻々すべて獄中生活の回想ばかり——看守、罪人や同室の良子、吉子から役人、通訳、大鳥アパートの管理人……彼らが一斉にわたしの頭の中にあらわれた。わたしはひどく恨んだり、悲しんだり、時には戸のすき間から隣のをぞき、華山へ遊びに来た客が、むこうで談笑しているのを見ると、連中がにくらしかつた。彼らの話がわたしの文章に影響することを恐れて、わたしはこちらでわざと拳骨で机をパンパンたいて、大声で日本の警察の口ぶりをまねて、ののしかった——バカヤロー！」

このときの事件は、当時二十四歳であった作家、武田泰淳にもかなりの影響を与えたいしい。彼は

「私はその事件以来、すこぶる用心ぶかくもなり、如何なる行為をなす場合にも、いちおう疑ってからとりかかるようになった。利口になったかわりには、無邪氣さを失った」<sup>⑤</sup>

と書いている。当時、武田泰淳ら中国文学研究会の同人

は、「日本と中国の間に虹のような橋をかけ得るといふ美しい夢」をもち、中国人留學生が家に遊びに来ることも多かった。

市川に当時亡命して来ていた郭沫若を武田泰淳が訪ねた時、「あのひとときあうのは注意した方がよい」と忠告されたという。しかし、武田泰淳は、彼女を無邪気で、「気がねもせず、右顧左盼せず、卒直に意見ものべ、あまり計画も使わない人」と見ていた。

「彼女の作品は感心して読んだことは一度もないが、彼女の性格に反感を持ったことは全くなかった。当時の私が不満だったのは女性としての魅力に欠けている、その一点だけであった。その血色のわるい表情や、痩せた肩つきなどがめも少し綺麗だったらなああと考えたことがあった。しかし気分がサッパリしてイヤみが全然ないので、かなり乱暴なそぶりが有っても気にかからなかった。あぐらをかくと緑色の毛系のズロースが見えたこと、木綿の靴下にも皺がよっていたことなど、なりふりかまわぬ点も不愉快ではなかった。」

武田泰淳の紹介したアパートで、彼女はおとなしい、じみな生物学者の青年と同棲していて、家まで日本語を

習いに来た二人を武田泰淳が送っていくこともあったが、特高の刑事たちは、武田泰淳と謝冰瑩の交際から、満洲国皇帝暗殺か何か、大それた陰謀を想像し、予備検束をしたのだった。

武田泰淳はステッキで尻をなぐられるなどしながら取調べを受け、二十五日の拘留のあと、更に二十日間とめ置かれたが、彼女と黄さんは二十日の拘留で釈放された。拘留中の彼女は、平然としており、スリで入っていた男が、便所の帰りに彼女の房の前で、着物のスソをまくって彼女をからかったときのことを、

「女士はたちまち大声を発して、非常な勢いで相手を罵った。その罵り方がいかにも自然で、絶対的で、聴いている私まで、精氣と勇氣が湧きあがってくるのをおぼえた。独立し、反抗することに慣れている中国女性の怒りにみちた罵言は、ああした醜悪な濁り激んだ空氣の中では、殊に清風にも似て効果的であった。」と回想している。彼女は釈放されるとすぐ武田家を訪ね、自分のため息子さんに迷惑をかけたとあやまり、今後の身の上についても心配していたというが、武田泰淳が釈放されて帰宅したとき、

「湯殿で垢としらみで痩せおとろえた私の背を流しな



がら母は『馬鹿だね、お前は。何回も何回も皆に心配をかけて、困ったもんだ』とふるえ声でたしなめ、かつ『謝の奴』とか『謝が』とか、多少、女士に対して怨みがましい口調を示した。それ以来、母は中国の青年の来訪があると眉をしかめるようになった。」と書いている。

(七)

謝冰瑩は、のちにこのときの東京での生活を回想し、「なつかしい日本の友人たち」という一文を書いている。中国文学研究会同人たちについて

「民国二十四年、二度目に東京に着いたある日の午後、三人の日本の青年が訪ねて来た。二人は近視の眼鏡をかけており、岡崎俊夫というのだけがわりあい活発で、話を好み、眼鏡をかけていなかった。竹内好は背が高いくらいでなく、相当太っていた。武田の背はとりわけ低くて、いつも目を細めて笑い、あまり話をしながらなかった。竹内好は、思想家のように見えるところが、いつも沈黙していて、時に首をかしげ、何か思索しているようであった。」

と観察しており、目黒警察署に拘禁中には毎日四回の「運

動」に出るときに彼女の部屋の前を通る武田泰淳と視線をかわしたが、お互い苦笑の表情をするだけで、一言もことばはかわせなかった。武田泰淳は独り子で、父親を早く亡くしており、わたしの巻きぞえをくって、万一、生命の危険があったらどうしようと、非常につらかった。釈放されて、彼の牢の前を通ったとき、

「彼は羨望と祝福のまなざしでわたしをながめ、少しも怨んでいなかった。わたしはこのとき、心中いっそうつらくなり、出獄後、長泉院へ駈けて行って彼の母親を訪ねたかったが、刑事があとをつけて、彼女に何か不利なことになりはしまいかと恐れた。そのときから今まで、ずっと武田と彼の母親のことが気にかかっている。」と書いている。

この「謝冰瑩事件」は、当時、日本の新聞でも報道され、上海の新聞までも、謝冰瑩は「国際社会主義者の活動分子」と書き、柳亜子は日本駐在の領事館と留學監督処に保釈を求める電報を打った。こうして、日本もついに彼女の安住の地ではなく、祖国にもどるしかなかった。八年間一日も休まず書きつづけた日記や、写真や原稿などもすべて日本で没収されていた。

上海から香港を経て桂林に行った彼女は、間もなく、南寧の高校で国文を教え、週刊『広西婦女』の編集などをする。

一九三七年、蘆溝橋事件が勃発すると、南岳衡山で療養していた彼女は、再び、「女兵」として前線に赴く。長沙で湖南婦女戦地服務団を組織したあと、東奔西走、抗日戦の戦場を駆けめぐっては、多くのルポルターージュを発表する。重慶で『新民報』の副刊『血潮』を編集もした。

一九四〇年から四三年まで、彼女は西安で文芸月刊誌『黄河』の編集主任をした。この期間に『新従軍日記』、『在火線上』、『戦士の手』、『姉妹』、『梅子姑娘』、『写给青年作家的信』、『抗战文選集』、『在日本獄中』などを出版している。

一九四三年夏、西安から成都に赴いた彼女は、制革学校で教師をしていたが、抗战勝利の後は漢口に行つて、『和平日報』（もとの『掃蕩報』）と『華中日報』の副刊の編集主任をするともに、託児所も創設した。

一九四六年、『一個女兵的自伝』中巻を自費出版したあと、北京師範大学に招聘されて「新文芸習作」を講義し、月刊誌『黄河』を復刊して編集主任となった。

中華人民共和国が成立する一年前に、台湾師範学院（台湾師範大学の前身）に招聘されたことが、その後の彼女の運命を大きく変えた。教授となって、ここで国文と「新文芸習作」の講義を始めた彼女は、それ以後ずっと現在まで海外での生活を続けることになる。

#### Ⅵ

台湾での教師生活の間にも、謝冰瑩は創作活動をやめず、多数の長編小説と短編小説集を出版した。

五十年代に前後して三年間、マレーシアとフィリピンで講義をしたが、台湾にもどると『菲島遊記』、『冰瑩遊記』、『馬來亞遊記』、『海天漫遊』や、フィリピンを背景にした長編小説『碧瑤之恋』を出版した。

六十年代には主として児童文学の創作と研究にうちこんだ。

一九七二年八月、久しく会っていない子どもや友人に会うため、船でアメリカに向かったが、途中、大波で船が傾いて転倒し、右大腿骨を折った。二十数日間痛みをこらえ、アメリカ、ペンシルバニアに到着後、直ちに病院で手術、一年後台湾にもどって治療をつづけ、スチールの杖をついて歩けるようになる。

二十数年に及んだ台湾師範大学を退職し、一九七四年再びアメリカに行き、サンフランシスコに夫の賈誼筧とともに住んでいる。台湾で仏教に帰依するようになり、一九五六年には「慈登」なる法名も与えられ、家に観世音菩薩像をまつり、毎日必ず礼拝をし、机上の白銀の小さい塔には、インドからの三粒の仏舍利を納めるといふ。符浩との間に生まれ、符浩の母のもとに預けられて成長した娘の符冰は、一九六六年「文革」の始まったとき、北京中央戲劇学院の職場で迫害され、三十六歳で死亡している<sup>(註)</sup>。

サンフランシスコでの謝冰瑩は、毎朝六時に起床、朝食後、階上でお経をよみ、運動をし、七時四十分には杖をついて、バスで中国街の英語学校で英語を学び、おかずを買い、午後は新聞、雑誌や友人からの手紙を読む……といった毎日で、退職後も長編小説を一編書いており、ほかに『女兵自伝』の続編や「五四」以来の作家印象記、それに小さい読者のために一、二冊の仏教經典のものがたりを書くとうしているとのことである。

動乱の時代を、自分の信ずるままに生きようと、反抗し、闘いつづけたかつての「女兵」作家の胸に、いま去来するのはどういふ思いであろうか。(一九八七、七、六)

(註)

(1) 近藤春雄『中国学芸大事典』によれば、謝冰瑩の作品の邦訳には「九人の除隊兵」(中山樵夫訳 苦悶する支那所収 万里閣 昭和一六、二)、『女兵士の自伝』(諸星あき子訳 青年書局 昭和一四)、『女兵』(中山樵夫訳 三省堂 昭和一五)、『女兵十年』(共田晏平訳 河出書房 昭和二九、二)がある。

(2) 前記『中国学芸大事典』では「一九〇三年、清の光緒二十九年生まれ」とするが、誤りであろう。本文中にあげた中国で出版された資料ですべて一九〇六年になっており、また『一個女兵的自伝』でも、女兵士となった一九二六年のことを書いた部分に「まだ満二十歳にもならぬ子ども」と自分のことをいっている。

(3) 『謝冰瑩作品選』の編後小記(編集後記)では謝鳴崗となつてはいるが、『中国文学家辞典』(四川文艺出版社、八五年三月)をはじめ、本文中にあげた資料はすべて謝鳴崗とあり、これに従う。また前記「一個女兵的自伝」の中でも、『謝冰瑩作品選』の自伝部分ですべて「鳴崗」である。

(4) 『中国現代女作家 上』四八一ページ。

(5) 一九一五年五月九日、日本が二十一箇条の要求を袁世凱政府に承諾させたが、この恥辱を忘れないため、以後五月九日を国恥記念日とした。

(6) 一九一九年五月四日、北京に起つた学生デモ隊と軍警との衝突事件に端を発した中国民衆の反封建・反帝國主義運

動。

(7) 『中国現代女作家 上』四八一ページ、(「我是怎樣寫作的？」)

(8) 『一個女兵的自伝』(『台港和海外華人女作家選 上』四三〇—四六六ページ)

(9) 『謝冰瑩作品選』「家庭監獄」(一九二二—二五五ページ)

(10) 王澐は『賽金花』の主演女優として有名になった。四二一年からアメリカで演劇活動をし、新中国成立後、帰国申請したが逆に投獄され、五五年に祖国にもどってから、四人組による迫害を受け、七四年獄中で死亡。王澐については『ひとびとの墓碑銘』(霞山会、昭和五十八年二月刊)

「根なし草」の悲しみ——アメリカの中国女流作家たち——阿頼耶順宏 参照。

(11) 『謝冰瑩作品選』「窮困の大学生生活」二九三ページ。

(12) 『中国現代女作家 上』四九二ページ。

(13) 『満洲事変』のこと。一九三一年九月一八日、日本軍が南満洲鉄道を柳条湖で爆破した。

(14) 『謝冰瑩作品選』「在日本獄中」七三五ページ。

(15) 以下、この項については『中国文学』第百一号(昭和二十二年十一月号)中国文学研究会編集・華光社発行に掲載の武田泰淳「謝冰瑩事件」二二—二七ページによる。引用の部分の旧仮名使いは、現代かなづかいに改めた。

(16) 「懐念幾位日本人」(『謝冰瑩作品選』四九八—五〇四ページ。書かれているのは(一)中竹繁子(『朝日新聞』記者)、(二)神近市子、(三)加藤(原文は藤)英子(『婦女文芸』社記者とあるが、『女人芸術』社のことであろう。)(四)竹

内好と武田泰淳である。

(17) 『中国現代女作家 上』四九〇ページ。